



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 台湾における日本現代文学受容について : 読者の村上春樹世界                                                      |
| Author(s)    | 許, 均瑞                                                                               |
| Citation     | 大阪大学言語文化学. 2001, 10, p. 59-74                                                       |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/77995">https://hdl.handle.net/11094/77995</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 台灣における日本現代文学受容について

—読者の村上春樹世界— \*

許 均瑞 \*\*

在過去十數年來，台灣的日本熱成爲很顯著的社會現象並且集中了大家的注目。關於這陣日本熱，由許多的觀點被觀察著。如，是受到了日本殖民地時代的影響或者是反映出資本主義等等的論點也一一成爲了研究的主題。當然，我們不能無視此類觀點，但是，在這些研究中用更微觀的方式去觀察並提出台灣受容方的意見之必要性也隨之增高了。目前，在台灣的文學範疇中，日本現代文學的進入台灣市場越見明顯。本研究即以在台灣第一位受到大眾喜愛的日本人作家村上春樹爲例，設法去探求其被台灣讀者喜好的原因。

這個村上到底有著些什麼樣的魅力？又是如何獲得讀者的青睞的？村上的大受歡迎可以從許多的角度來探討，可是其原因至今仍未有定論。在本研究中，將先提出台灣以外的地區關於村上爲何受到喜愛而做出分析的一些評論，並且說明爲何那些評論中的觀點無法闡明台灣的村上熱。而爲了釋明這些問題點，本研究嘗試以台灣的村上公式網站中的讀者爲研究對象，分析了他們在網站中的形象，並且以曾與網站有過接觸的讀者爲對象做了問卷調查。藉由這樣的研究手法，我們可以考察到一個在台灣被受容的日本的東西的實例。在本研究中分析了讀者在村上公式網站上的投稿，並著眼於問卷中讀者的真實的意見，而且儘可能的介紹出來。

在分析的過程中，筆者發現，在讀者的文章中浮現出一個由讀者所維繫著的村上春樹的世界。也就是說，台灣的村上的讀者們在村上不存在於此（台灣）的狀況下，以個人因爲村上所誘發的某種情感藉由文章的形式呈現出來，並在公式網站上公開，得以和其他的讀者一起分享。像這樣的態度在問卷調查中也得到印證，與以往的讀者不同，村上的讀者可說是具有積極的和其他讀者交換意見和心得的欲求的。

另外，從問卷的回答中，也可觀察到讀者對於村上的一種相當冷靜的態度。此種冷靜思考的態度也將讀者對於村上的喜愛與日本熱畫上一條界線。而本研究也經由提出受容方的意見，試著描繪出一個在台灣被接受的日本現代文學的

---

\* 台湾の日本現代文学受容—読者の村上春樹世界—

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

實例。

## はじめに

日本で流行っているモノを現在台湾のいたる所で見かけることができるのも驚くことではなくなりつつある。そして、日本の流行文化が大量に台湾に紹介されている現在、日本現代文学の台湾市場への進出も目立ってきた。言うまでもないが、消長著しいファッションや歌謡曲などに比べ、文学は素早く交替することが難しいと思われる。実際、従来の台湾においても、日本文学は「教養としての日本伝統文学」という学問的なイメージから抜け出せなかった。

その中で、日本現代作家の一人・村上春樹は、台湾の出版社の積極的な翻訳と紹介によって台湾で一時期かなり人気を博し、今までの日本文学が背負っていた「インテリ向け」という先入観の壁を破壊したと言える。しかし、台湾の読者が一体どのような理由で村上を受け入れたかという問題についての研究は見当たらない。今日の様々な形での日台交流における一つの成功例として村上人気を探究することによって、「日本のモノ」が台湾の人々に受け入れられる原因も明らかにできると考えられる。

そこで、本研究では村上の台湾文学市場への進出を作家論・作品論という文学研究の枠で見る観点から離れ、台湾における村上読者の行動を中心に考察と調査を行った。読者が村上作品をどのように受け止めているのか、また作品がその行動にどのような影響を与えているかという問題に焦点を置いた。その際に作者不在のまま成立している台湾読者の「村上春樹世界」の存在が浮かび上がってくることを示し、その中の読者像の分析を行う。

## 1 海外で読まれている村上について

村上に関する研究の多くは文芸評論という観点から村上の作品を分析している。その中に村上が海外で博している人気の原因とどのように批評されているかを分析するものがある。

『国文学』（東京・学燈社刊）1995年3月号では「世界から：翻訳と反響」という村上の特集が生まれ、アメリカ<sup>1)</sup>・ドイツ<sup>2)</sup>・ポーランド<sup>3)</sup>・中国<sup>4)</sup>・韓国<sup>5)</sup>で翻訳された村上の作品について、ほとんど同じ観点を提出している。すなわち、村上の作品は今

<sup>1)</sup> ホセア・ヒラタ「アメリカで読まれる村上春樹－『FUN』な体験」

<sup>2)</sup> ユルゲン・シュタルフ「ドイツの村上春樹」

<sup>3)</sup> アンナ・ジェリンスカ・エリオット「ポーランドの村上春樹－出版社をめぐる冒険」

<sup>4)</sup> 田建新「中国の村上春樹－“新鮮血液”」

<sup>5)</sup> 金碩子「韓国の村上春樹」

までの日本文学と違っており、「読みやすい」「日本的なモノが感じられない」ことが海外での村上人気の原因であると分析し、海外で最も受け入れやすい作家・作品であるという評価を与えた。しかし、これらの評論は個人による文芸評論であるため、提出された観点は読者に対する客観的な意見調査の結果に依拠したものではない。つまり、評論家の独自の論点になってしまう危険性がある。

そして、アジア圏内において受容される村上はそれぞれの国の政治状況や経済環境によって違う時期と形式を得て紹介され、受容されていると考えられる。その中でも、とりわけ台湾と同じように日本による植民地支配を経験した韓国における分析は興味深いと言えよう。金（1995）<sup>6)</sup>と尹（1998）<sup>7)</sup>では、韓国で日本に対する嫌悪感が村上の人気に影響しておらず、かえって「ハルキ旋風」<sup>8)</sup>を形成しているのは、韓国の読者たちが従来の日本文学の一つとして村上を見ることを拒否し、村上の文学を日本という要素から切り離して考えているからと説明している。そして、村上を受容した結果として村上を模倣する作家が現れたという韓国の社会現象について述べたが、一体どのような模倣であるか、実例が欠如しているため、不明瞭である。ゆえに韓国の読者たちの村上に対する考えと人気の状況が大まかには述べられたが、詳細な分析や実状の記述が行われていないと考えられる。また青山（1998）<sup>9)</sup>は、英米の雑誌に掲載された村上の書評を比較し、その中で見られる、新しい日本文学の姿を国際舞台に示したという好意的な論調を取り上げたほか、英米の評論家が村上の作品においてもやはり従来の日本文学の影<sup>10)</sup>を追っていると指摘した。しかし、そこで取り上げられたものはむしろ「インテリ」の観点であり、一般の読者の感覚が無視されていると言えよう。

これまでの「海外における村上」に関する文芸批評は、読者の立場から見ることが少なく、読者にとって村上を愛読することがどのようなことに依拠しているのかという問題に関してもあまり論じられていなかった。しかし、このように欠如しがちな読者の声は、研究や文芸批評から離れたところではよく提起されている。すなわち、「海外で読まれている日本文学」という観点で雑誌や新聞で特集が組まれ、読者の意見や出版社の刊行状況・動機が紹介される。その中でも、韓国の状況が最もよく日本に紹介されている。そこでは、韓国における村上人気形成の主因として、民主政治の発達と経済成長の

<sup>6)</sup> 同注 5。

<sup>7)</sup> 尹相仁（1998）『冒険の時代 韓国の『村上春樹現象』』『日本文学研究論文集 46 村上春樹』東京・若草書房

<sup>8)</sup> 上述、尹（1998）の用語。

<sup>9)</sup> 青山南（1998）『村上春樹の《象の消滅》』『日本文学研究論文集 46 村上春樹』東京・若草書房

<sup>10)</sup> 村上作品中の様々なシーンの描写は川端康成・夏目漱石・三島由紀夫・谷崎潤一郎等の作品に現れた場面に似かよっていると分析され、青山が取り上げた英米の評論では、それは村上が従来の文学作品に向けて発した信号であると述べられている。

終焉という時代性、またその中で育った20～30代の若者の世代が感じた虚無感や喪失感が挙げられている<sup>11)</sup>。読者の発言もとりあげられており、村上を愛読する理由として「自分の貴重な青春を刻んでくれた」「村上を介して物事を真剣に考えるようになった」と述べている。

雑誌の紹介には、韓国ほど村上の翻訳点数が多く、村上を熱狂的に支持する国はほかにはないとあった<sup>12)</sup>が、それは台湾読者による村上世界の実像がまだ明らかにされていない故のことだと考えられる。本論文では台湾読者が村上を支持するためにとった行動を分析し、アンケート調査で読者の考え方を明らかにしたいと思う。

## 2 研究対象

### 2.1 選定基準

台湾で翻訳・出版された村上作品は27冊にのぼる。文学作品の翻訳には常に著作権問題などが伴うため、出版社が積極的に出版することを村上人気の証拠の一つと考えることができる。それゆえ、読者群の数を確定できなくても、台湾でも確実に村上作品は読まれていると言えよう。一方、読者群の存在を明らかにすることは困難であり、読者の発言が頻繁に見られる媒体を見つけることが重要な作業となる。本論文では、村上読者による大量の投稿が読める、台湾で唯一村上作品の版權を所有する時報文化出版社の運営による台湾の村上公式ホームページとそこに寄稿する読者を研究対象にした。

### 2.2 公式ホームページの構成

台湾の村上ホームページは「村上春樹の網路森林」<sup>13)</sup>という。このホームページは読者の投稿を中心に構築されているホームページである。この中の「美食」「生活」「音楽」「愛情」それに「読者の創作」のコーナーは、読者の投稿文章で占められている。また、読者間の交流ができるように「対話空間」というコーナーもある。筆者の観察では、このホームページが1998年11月末に開設された当初は爆発的に投稿数が伸びたが、現在はかなり落ち着き、平均で一ヶ月に20～30通近くのスピードで増えている。この様に、作家の存在より際立っている読者の投稿文章がこのホームページの最も大きな特徴となっている。これらの文章には読者の感想や感性が鮮明に表出されていると考えられる。日本にも「村上朝日堂」<sup>14)</sup>という、村上が直接に読者と交流を行うホームページがある。

<sup>11)</sup> 「韓国人がよく読む日本文学～村上春樹と村上龍の読まれ方」『ダ・ヴィンチ』2000年6、7月号、東京・メディアファクトリー

<sup>12)</sup> 同注11。

<sup>13)</sup> 「村上春樹の網路森林」<http://www.readingtimes.com.tw/authors/murakami/>

<sup>14)</sup> 「村上朝日堂」<http://pps.asahi-np.co.jp/span/asahido/>

しかし、そのホームページの主な内容はほとんど村上自身が寄稿した文章である。また、大量の読者が寄せる質問に答える村上自らの解答も掲載され、読者の注目を集めている。そちらと比較してみると、最も重要な人物「村上」が不在のままで成り立っている台湾の公式ホームページにおける読者の投稿文章の重要性は明らかであろう。台湾の方では、村上が公式ホームページに存在している読者の世界のバックグラウンドにすぎないということが言えるのではないだろうか。なお、以下で本論文が取り上げた読者の文章例はすべて中国語で書かれたものであり、本論文での引用は全部筆者により翻訳されたものである。

### 3 公式ホームページの分析

#### 3.1 読者の投稿文章

本論文では、台湾の村上公式ホームページにおける読者の投稿文章を、A「村上的気分」とB「自己表現の手段」という、二つの角度から考察した。「村上的気分」のある文章とは、読者が村上の名前や作品名を使い、村上への憧れを明確に表したものであり、以下のような例がある。

A:

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 一杯のコーヒーのために、仕事が終わると <b>村上的な喫茶店</b> へ行く。村上的な喫茶店というのは実にシンプルだ。一軒の小さい喫茶店に、テーブルがいくつか、客は数人しかいない。それにとても良い味のコーヒーが作れるクールなマスター一人にジャズがずっと流れているだけあれば十分だ。                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 耳だ。とてもとても平凡な耳だ。 <b>村上が描写した耳のような特別さが全然ない</b> 。しかし、僕はその二つの耳に対して、何とも言えない恋しさを感じる。じっと見ているうちに、まるで鏡に照らして自分の耳を見ているように感じてきた。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| そのような夏は <b>村上春樹のすべての作品にある夏だ</b> 。青春のゆく場所はない。何もしいまま生きていた夏だ。夏中私はずっとスパゲッティを作っていた。さらに小さい町の太陽で完全に熟したトマトを加えて、 <b>私の1995年は村上がピンボールで遊んでいた1973年と同じだ</b> 。人生にはただスパゲッティを作ることしか残っていなかった。様々なソースを作り、友達が無意味だと思っている料理作りに青春を投げうった。…私の友達誰も村上春樹を読まない。彼らは皆人生ですべきことがはっきり分かっている人ばかりだ。彼らは95年の私が一体どうなったか全く知らなかった。ただ私が結婚し、そして消えたと彼らは思っている。その年、 <b>私の村上春樹だけが友達であった</b> 。その年の夏が終わって、私は村上の作品について話し合える学生ができた。彼らは村上について語る先生が好きだ。でも、 <b>私にスパゲッティを作る日々があったとは誰も知らなかった</b> 。 |

村上式人間は幼い頃から音楽が人間にとってどういうものかが分かる。『国境の南、太陽の西』の中の始は良い例だ。11才の始は少し年上の島本と出会って、ナット・キング・コールの“プリテンド”を聞いた。私は目を閉じ、二人の運命がゆっくり触れ合うあの場面を想像した。…偶然にナット・キング・コールの“プリテンド”を買ってきた。ずっと繰り返して聞いていた。本の中にある状況を真似して、太陽の光が射していて電気の灯らない黄昏の部屋で彼女と一緒に静かに聞いた。が、11才の始がなぜそのメロディと歌詞に共鳴したかということがやはり分からなかった。彼女と見あって笑った。「多分これが私たちと村上の違いだろう。」…自分は目まいの内にその何年間かを過ごしたような感じだ。…ある日私がナット・キング・コールをプレイヤーに入れると、“プリテンド”はまた古い踊りを踊りながらスピーカーから流れてきた。今回は分かった。記憶はジャズの誘いを受け、悲しみに溢れた踊り場で踊り始めた。なるほど、村上式なメロディは青春の後をついてくるものなのだ。…

#### 緑の苺のショート・ケーキ

材料：ホットケーキミックス2杯・水1杯半・いちご・生クリーム…

作り方：（省略）

PS・これは絶対成功できるデザートだ。朝食として食べてもいい。

背景音楽：Lemon Tree

文：『ノルウェイの森』、村上春樹

気分：緑が欲しがっている恋は、男の人に苺のショート・ケーキを買ってきてもらってすぐ捨ててしまうような、惜し気のないものだ。このような迫力は、完治に恋した莉香のことを思い出させた。

例えば、これらの中の「緑」というのは『ノルウェイの森』に登場したヒロインである。また、「耳の特別さ」は『羊をめぐる冒険』や『ダンス・ダンス・ダンス』に見られる表現である。他には、村上の作品によく現れるスパゲッティあるいは音楽への言及も読者にとって、村上に対する憧れを記述したものだと考えられる。すなわち、村上の公式ホームページを通じて、読者は村上に引かれる部分を自分の文章で表現し、公開して、他の村上読者と一緒に味わうこととなっていると言えよう。

次にB「自己表現の手段」であるが、それはさらに二つに分かれている。Aは村上の作品によく使われる手法を使い、文体やプロットを模倣する文章である。特に、村上のフィクションの書き方が最もよく模倣されている。以下は投稿文章の一部である。

B:

A

「知っているか。象はとても身勝手な動物だよ。」「そう。」「本当だよ。それは私がこの前の象の旅で体験したことだ。」「それで、何か得たの?」「なにも。」「なにも?」「本当は何があるかといえば、象の身勝手なんだ。」「ちょっと分かったな。」「はは…。」

「ちょっと待って。」びっくりした。誰かと思ったら、なるほど、皿の中のスパゲッティが話したのだ。「私をこんなふうに食べちゃあ駄目よ」とスパゲッティが言った。「…?」「私は普通のスパゲッティじゃないよ。こんなふうに食べちゃあ駄目だよ」と彼女は改めて強調して話した。「せめて挽き肉・ベーコンかシーフードとかを入れないと。」「それでね。こんな缶詰めのスパゲッティソースは、あーあー」、彼女はいやそうに体についたスパゲッティソースをふるい落とした。こんなうるさいスパゲッティに会ったのは初めてだ。

以上の文章はこの類の文章の典型だと言える。村上の短編作品には、このような「モノと会話する」という幻想的な文章が多く、長編の小説と違ってプロットが理解しやすいし、模倣する際にも読者にとって、最も簡単な形で表現できる文章だろう。そして、同じ自己表現の手段として、イのように全く村上と関係がなく、自己の感性を訴える文章も数多く見られる。ここで一つだけ例として取り上げる。

イ

人間の希望と未知の未来を海は負っている。海を見る…。海は私の心にあることを見通してくれると信じている。海を聞く…。海に何を言っても、他人に漏らすことはないと分かっている。海は私の心を聞いてくれる。私は海のすべてを受け入れることを学ぶ。

この文章は、内容もプロットもかなり村上の作品から離れていると思われる。しかし、このような文章は読者にとって、村上の存在があるからこそ表現できるようになったものだと考えられる。たとえ、一見村上と全く関連なく書かれているようでも、村上に触発された何事かを表現するために読者が読み手から書き手に変身するというような読者の内心が窺える。そして、ここに載せた文章以外に、読者が自分の夢の記述や紀行文を投稿しているのもよく見られる。以上の考察から、台湾の村上公式ホームページには読者の独自の世界が存在していると言えるのではないか。

### 3.2 公式ホームページの分析のまとめ

ここではホームページに見られる読者の投稿文章についての考察をまとめて、四つの分析結果を挙げる。(1)「村上的表现」は一種の喚起されたイメージと考えられる。すなわち、料理も音楽も村上との繋がりで「特別なもの」となっていると見られる。その醸し出された「村上の気分」を言い換えると、読者は村上の存在によって、自分の感情を表現できるようになると言えよう。そこには、(2) 文学鑑賞と微妙に結合している



「村上的世界」が存在している。読者にとって、村上は自分の青春と感覚を上手に表現した作家であり、村上を表現への一つの切り口として見ることができる。また、(3) 読者の方も、読書の感想や作品から得られた感性を表現するために、文章という形で積極的に自分の世界を構築していると考えられる。そして、(4) それらの文章には読者個人の価値観と人生観が表れている。

以上4つの分析結果を挙げたが、果たして公式ホームページへの投稿者全員が村上の愛読者であろうかという疑問も浮かんでくるだろう。確かに村上との関連を何らかの形で表現した読者は村上を好んでいると言えそうだが、個人の感情の表現に終始する文章は村上の愛読者であることを疑わせるだろう。こうした疑問に関して、公式ホームページ全体の雰囲気を観察してみれば、愛読者だけが構成する世界とは言えないが、村上を嫌悪する人間が投稿したがる場所とも考えがたい。したがって、「自己表現の手段」として投稿を行う人間として、特に村上とつながりのない投稿者の存在も考えられる。そして、そのような一群の存在が、この公式ホームページの読者世界により多様性に富んだ考え方や表現をもたらしていると考えられる。

愛読者ではない、あるいはファンであると扱われることに対して嫌悪感を覚える人たちの存在は、公式ホームページが閉じた世界ではないことの証明にもなると思われる。また、これらの文章を考察する過程で、「日本」に言及した文章も意外に少なかった。村上は日本人の作家だが、彼の支持者たちは果たして「日本」をどのように考えているのか。そこで、公式ホームページへの投稿者の考え方を明らかにするため、アンケート調査を行なった。

## 4 アンケート調査

### 4.1 実施概要

今回のアンケート調査は台湾での村上の受容について、村上の読者を対象にし、初めて一貫した問題意識のもとに行なった調査である。こうした調査を用いて読者の意見を引き出す作業によって、今までの村上現象に対する評論で欠落している部分、すなわち読者の意志を表すところを補うことができると考えられる。調査の概要については、以下の通りである。

目的：一貫した問題意識のもとに読者の意見を引き出す

期間：1999年9月10日から1999年9月21日まで

対象：公式ホームページに投稿したことがある村上読者

実施方法：各被調査者宛てに電子メールで送信する

回収率：25%（231通中57通）

内容：質問に対して、選択肢で意見を表すことおよび自由回答を任意に記入してもらう。アンケートは個人データのほか、以下の 11 問からなる。

1. 村上の小説を読み始めたきっかけは何ですか。
2. 村上を読む動機を選んでください。
3. 今までに村上の作品を何冊読みましたか。
4. 村上の作品を読んだために、他の日本文化（文学）と接触したりしましたか。
5. 村上の作品を読んでから、日本・日本人・日本文化（文学）をもっと理解できたような気がしますか。
6. 台湾の村上ブームについて、どう思いますか。
7. 時報文化出版社によって設立された公式ホームページ以外に、村上に関するイベントに主体的に参加したことがありますか。
8. 村上に関するイベント以外に、このような経験がありますか。
9. 「とても村上的だよ！」について、どのような意味が表されていると思いますか。
10. 村上以外に、よく外国人作家の作品を読みますか。
11. 自分を村上ファンだと思っていますか。

#### 4.2 被調査者の概要

被調査者の概要を次のようにまとめた。まず男女の比率は、男性が全体の 53%、女性が 47%であった。また、被調査者の 93%は未婚である。被調査者の年齢層と学歴は表 1 と表 2 から分かるように 20 代（74%）の大卒者（60%）が多く、現在学生である者がその中の中心的な存在（31%）である。また、20 代後半の被調査者が大半を占めているので、学生でなくても勤続年数がまだ 3 年以内（56%）の、社会に入ったばかりの人が多い。地域分布に関しては、居住地を明記した被調査者の数を表 3 に列挙した。表 3 から被調査者が台北市に集中していることが分かる。

被調査者群の代表的なイメージとして、20 代の若者の姿が浮かんできた。台湾の「村上現象」では、若者が圧倒的に村上を支持していることが明らかになった。公式ホームページへの投稿者に関して、こうした数値からどのような意味を読み取ることができるのか。ここでは、台湾で 90 年代に行われた社会状況調査の分析結果として発表された論文集<sup>15)</sup>の成果を借りて分析を進めていきたいと思う。

<sup>15)</sup> 張莖雲他編（1997）『九十年代的台湾社会 社会変遷基本調査研究系列二（上）』台北・中央研究院

〈表1〉被調査者の年齢層

| 人 数  |    | 女 性 | 男 性 |
|------|----|-----|-----|
| 10 代 | 前半 | 0   | 0   |
|      | 後半 | 3   | 5   |
| 20 代 | 前半 | 10  | 8   |
|      | 後半 | 14  | 13  |
| 30 代 | 前半 | 0   | 3   |
|      | 後半 | 0   | 1   |
| 40 代 | 前半 | 0   | 1   |
|      | 後半 | 0   | 0   |

〈表2〉被調査者の学歴

| 人 数   | 女性 | 男性 |
|-------|----|----|
| 大 学 院 | 7  | 4  |
| 大 学   | 20 | 22 |
| 高 校   | 0  | 5  |

〈表3〉被調査者の居住地

| 人 数   | 女性 | 男性 |
|-------|----|----|
| 台 北 市 | 5  | 6  |
| 台 北 県 | 2  | 1  |
| 他 地 域 | 2  | 0  |

### 4.3 被調査者についての考察

台湾の社会状況に大きく影響を与えたのは、経済発展と政治の変化だと思われる。韓国の村上人気についての分析で言及されていたような、近年発展をとげた民主政治とともに成長してきた20代の若者たちが社会においても経済の終焉を迎える現在において抱えている虚無感と喪失感は、台湾の村上の読者にもあてはまることができると考えられる。アンケートの集計からは、20代後半の世代が読者の大半を占めていることがわかる。ここ30年の台湾の政治・経済状況を詳しく述べることはしないが、そこには台湾と韓国の読者が感覚を共有している部分もあると考えられる。そして、被調査者の学歴にも注目したいと思うが、高学歴も村上を支持する要因の一つとなっていると言えよう。ここで瞿(1997)<sup>16)</sup>、章(1997)<sup>17)</sup>、郭(1997)<sup>18)</sup>が提出した観点を活用したいと思う。

まず、近年台湾で高まりつつある「台湾人」としてのアイデンティティは、中国文化を敬遠し外来文化を受け入れやすくなる態度として現れるという分析を瞿(1997)は行っている。これは音楽の好みに対する分析であるが、土着文化に関心を持つ人は日本の流行文化も受け入れやすいという分析結果は、村上作品を受け入れる場面にも影響をもたらす要素の一つではないかと考えられる。しかも、日本の歌謡曲を好むことに男女差が見られないという結果も、本論文の村上作品に関するアンケート結果(男性26:女性27)と一致している。

また章(1997)の中では、特殊な趣味を持つ人間は都市に集中しているので、同じ趣味を持つ人たちの間の交流も非都市部より多く容易であると述べられているが、これは

<sup>16)</sup> 瞿海源(1997)「社会階層、文化認同与音楽喜好」『九十年代的台湾社会 社会変遷基本調査研究系列二(上)』台北・中央研究院

<sup>17)</sup> 章英華(1997)「都市化、階層化与生活形態」『九十年代的台湾社会 社会変遷基本調査研究系列二(上)』台北・中央研究院

<sup>18)</sup> 郭貞(1997)「台湾地区民衆消費行為傾向之形成」『九十年代的台湾社会 社会変遷基本調査研究系列二(上)』台北・中央研究院

調査によって台湾にも当てはまることが分かった。この分析によって、公式ホームページによく投稿をする人たちは台湾で最も発達している北部、とりわけ台北市・台北県という大都市圏に集中していることが説明できると思われる。

最後に、郭（1997）は台湾民衆の購買行為について、購買行動に伴う判断力形成では、自我に対する肯定的な態度や自我の達成も重要な要因となると分析している。また、教育水準が高いほど自我の達成度が次第に高く、衝動購買行動も少なくなると述べている。しかも、高学歴者は消費するかどうかにかかわらず普段から印刷媒体を使い、情報を収集する傾向が見られる。これは今回の分析対象がインターネットという媒体を使い、趣味を同じくする人々との交流を行うという、村上読者の行動の裏付けとなるだろう。勿論、印刷媒体とインターネットの性質はかなり違っているとも言える。しかし、情報の表示形式に関しては印刷媒体と同じく文字であり、情報が瞬時に消えてしまうこともないということで、インターネットも教育水準の高い人たちのよく利用する媒体になりつつあると推測できるだろう。

以上の分析から、村上読者の行動を単なる日本ブームだけでは説明することはできなくなると考えられる。そこで、被調査者が果たして冷静に村上を読み取っているかどうかを、アンケート回答の詳しい内容を紹介して明らかにしたいと思う。

#### 4.4 アンケートの結果

まず、被調査者がどのくらい村上の作品を読んだかという質問から紹介する。被調査者の半数が、調査が行われた当時台湾で22冊出版されていた村上の作品を15冊以上読んでいた。したがって、被調査者群は村上の作品にかなり接触していると判断できる。そして、印象的な作品については、『ノルウェイの森』が最も頻繁に挙げられている。また印象的な作品として取り上げる理由を説明する自由回答から窺えた被調査者の意見を、次の三つの文章を例として紹介する。

最も印象に残っているのは二つ、『ノルウェイの森』と『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』である。前者は最も村上の作品に似ていないが、登場人物に共鳴しやすい。後者で私は村上を見直し、心から村上はすごいと認めた。ただの流行の符号ではないということ。

最も印象に残っているのは『1973年のピンボール』である。その本から与えられた重さと墮落感は今までにないものである。台湾の文学はそういう感覚が書けないのだ。もし無理にでも理由を言うならば、実はない…私がデザインを習っていたときのことと同じで、感覚は絶対的であるが、唯一必要な理由ではないわけだ。

作品のどれも違う深みが含まれていると言えるはずだ。違っているから比較もできなくなる。共感できるので、読むようになる。この世に同じチャンネルの思想が存在していることが分かって、とても嬉しいことである。

太字の部分から、被調査者がどのように村上を受け入れているかが明らかになる。村上の読書や支持という行為は被調査者にとって、心から村上を認めている証拠と考えられる。そのような共感は今までにない経験であり、被調査者にとって貴重な読書体験にもなる。特に、村上から得られた感覚が従来の台湾文学にはないものであるという意見も、自分の考えが「そのまま」描写されているのを見て感覚が触発されたという、まさに「村上現象」がなぜ起こるかということを説明できる理由だと思われる。こうした回答は村上作品に対する印象以外に、質問2の読書動機に関しても「共感」が非常に大切な要素となって浮かんでくる<sup>19)</sup>。

そして、質問4,5の、被調査者が考えている村上と日本の関係については、下のような結果が見られた。数値だけを見ると、被調査者は特に「村上と日本」という関連性を感じていないようである。村上の作品を愛読することに影響され、もっと日本文化・文学と接触したいという意欲は、肯定と否定の答えが大体半々となっている。ただ、読者にとって、村上の作品は日本を理解するよい媒介ではないと言えるのではないかと考えられる。

|                     | は い | いいえ |
|---------------------|-----|-----|
| もっと日本文化（文学）に接触したくなる | 53% | 47% |
| もっと日本のことを理解できた      | 35% | 62% |

さらに詳しく読者の意見を例として挙げてみると、次のような読者の考えが見られる。まず、肯定的な意見として、二つの回答例を取り上げる。

村上の書き方は台湾の読者にとって、少し‘違っている’と思われているようである。しかし、それは日本では普通なのかもしれない。私は村上の作品が必ずしも全部好きではないが、物事を叙述する彼の感覚をととても気に入っている。そういう感覚はもしかすると民族性の影響を受けたものである。だから、私は他の日本文学とも接触してみたい。

<sup>19)</sup> 「作品中にあるライフスタイルへの共感」71%・「現実生活から離れる精神のシェルター」「自我理解」53%・「新しい人生の価値観がもらえるから」38%・「日本文学を理解するために」「文学創作のサンプルとして」33%・「男女性愛の描写」31%

作品の中に多少現代日本人の考え方と観念が反映されている。まるで日本のドラマを見るように、かっこいい俳優と美しい女優を見るついでに、着ている服、使われているものや風景も眺める。

このような読者の意見が窺えたが、これらの考え方と反対に次のような否定的な意見も述べられている。

二つの可能性がある。第一は、私は村上の作品に対して、その文学性だけが好きである。ついでに日本文化を受け入れたかもしれないが、日本文化が村上作品中の重要なポイントではない以上、どうして自分を悩ませるために余計なことをするのか。第二、もしかしたら台湾ではもう多くの日本文化を受け入れているので、村上を読む際に全く文化上の隔たりや苦悩を感じなかった。だから、もっと日本文化を理解するべきかどうかという問題をそのようには考えなかった。

私は村上が描写したものが日本社会だとは思わない。彼の描いたものは実に個人の傾向のようなものである。つまり、国籍はそれほど大切ではない。村上の作品を読むのも日本社会を理解するためではなく、人生を理解したいだけである。

これらの意見を簡単に言い換えると、村上の作品の「日本」という要素を完全に無視することはできないが、特に気にする必要もないというのが、否定的な態度をとっている被調査者の意見である。ただ肯定的な姿勢を取る被調査者も、村上を「日本」との関連においては理解しようとはしない。確かに村上をきっかけに日本のことも知りたくなったというニュアンスを読み取ることは可能だと思われるが、肯定的な姿勢を示す被調査者でも、村上作品と日本との関連を追及する気にはならないようである。日本のことは知りたいが、簡単な文学状況や現代社会に関する皮相的なイメージ・情報を得る以上のことはしていないと言えよう。

また、被調査者は「村上現象」と「村上的」に対してどのように考えているのか。「質問6:「村上現象」に関してどう思いますか」、という質問に対しては、「作品が良いから、当たり前なことだと思う」が56%を占めた。この質問に関して、様々な意見が書かれている。例えば、年齢層やマスコミが煽った結果などの要素も無視することができないという意見もあれば、一種の流行文化現象としてまもなく消えてしまうというような捉え方もある。ここで、一つの冷静な被調査者の意見を取り上げたいと思う。この被調査者は次のように述べている。

すべての選択肢は正しいかもしれない。しかし、やはり特定の群衆は彼の作品が好きだといえよう。ちょうどあなたはその群衆の中にいるからこそ、そのブームを感じることができる。しかし、本当にそれほど拡大していった、その群衆以外の人にも影響をもたらしたか。そうでもないと思う。厳密には、台湾には確かに一つの村上ファンの群が存在しているとは言える。大体そういうことであろう。

この文章からは、単なる流行やブームで解釈できないというように「村上現象」の構成を理性的に読み取っている被調査者の姿が見られる。次に、村上の公式ホームページで非常に大切な役割を担っている「村上的」という言葉についてはどうだろうか。質問9:「村上的」の意味に関しては、「村上の作品にしか存在しない疎外感」という選択肢を67%の被調査者が選んでいる。この数字から、村上の読者に構築されている世界は「外」と「内」のように分かれていると考えられる。すなわち、読者にとっての「村上的」は作品に基づく感覚である。そして、それは「疎外感」を指している。しかし、外の人から読者を一つの群れとして見る際に、「疎外感」ということはむしろ読者にしか分からない感覚であり、読者群を描写する際に、どうしても「村上的」という用語を避けることができないと考えられる。一方、村上の読者として、「村上的」という表現に関して、かなりの嫌悪感を覚えている被調査者も少なくない。次に二人の被調査者の回答を引用する。

何も考えずに流行を追いかけている自己中心の熱狂者だ。

つまらない流行語だ。周りから村上の本を眺めている人が言い出した評語みたい。

これらの意見から被調査者にとっては、村上を愛読することや作品の内容に関係なく「村上的」という言葉だけが広く引用されることが非常に不愉快なことになっていると解釈できる。このように、被調査者群が自分の村上に対する読書行為と社会に見られている「村上ファン」や流行語としての「村上的」との繋がりを否定し、個人の読書行為を個人のレベルで受け止めてほしいという心理も窺える。

最後にアンケートの回答傾向は次のようにまとめることができる。まず、自分の読書行為に対しても「村上現象」に対しても、被調査者には自分の世界に閉じこもるのではない積極的な態度が見られる。それは、村上の読者が読書以外に自ら情報の収集や読書感想の交換を活発に行なっていることから分かるようになる。そして、「日本」という意識が最小限に抑えられていると言える。村上と言うと、日本人の作家というイメージがすぐ浮かぶだろう。しかし、今回の被調査者はそれを最小限に抑え、客観的な態度で村上に接触しようとしているのが観察できる。

## 5 結論および今後の課題

本論文では台湾における村上春樹の受容について、読者の公式ホームページへの投稿を分析し、読者群を対象にアンケート調査を行なった。台湾の村上読者の村上に対する考えと読書行動を維持する原因などを明らかにした。

台湾の読者は外来作家の村上に今までに表せなかった様々な感情表現を寄託していると言えよう。先行研究に言及された村上の文体の軽さや日本的なモノの欠如は、台湾の読者が村上を受け入れる最大の原因ではないだろう。今回の調査によれば、台湾の新世代が一つの外来文化や文学を受け入れる際、それが新しい観点や啓示をもたらせることが非常に大切な要素となっており、国籍や言語の影響は極めて少ない。つまり、どの国の文化もしくは文学でも、現代台湾という社会状況の中にいる新世代にとっては、素早く生活に適應するための適切な観点や今までにない感性を提供できるかどうか、その文化・文学を受け入れる最も大きな要因となるのである。アンケートの分析の中でも言及したように、現代台湾の情勢そのものが外来文化を受け入れる最大の原因になると言えよう。

台湾と日本の関係について、植民地時代の影響を追及するべきかどうかは受容側の年齢層に左右されると考えられる。若者よりも高年層の人たちの方が日本の歌謡曲を好むという傾向が、社会調査の結果として挙げられた。しかしながら、同じ調査で流行歌曲に関しては若者も日本のものを好んで聞くという結果が得られており、若者の間では、植民地時代の影響によって日本のモノに対する好みは左右されることはあまりないと考えられる。ゆえに、現段階の結論としては、台湾での村上受容は、日台間の植民地支配・被支配という歴史や極めて接近しているという地理関係を抜きにしても成立すると言える。

しかし、同じような解釈が他の日本現代作家の台湾への進出にも適用できるとは断言できない。村上春樹以外に村上龍や吉本ばななも台湾の文学市場へ進出を始めているが、これら三人の作品はそれぞれ形式を異にする。したがって、同じ日本現代作家についての受容形式の相違がこれからの研究の中心となるだろう。そして、このような受容状況の比較作業によって、台湾における日本文化の受容理論の枠組を構築することを試みていきたいと思う。

### 主要参考文献

木股知史編（1998）『日本文学研究論文集成 46 村上春樹』東京・若草書房。  
「世界から：翻訳と反響」『国文学』1995年3月号（特集：村上春樹—予知する文学）東京・学燈社。



『総特集・村上春樹の世界』（『ユリイカ』臨時増刊）東京・青土社、（1989）。

張苙雲他編（1997）『九十年代的台湾社会 社会変遷基本調査研究系列二（上）』台北・中央研究院。

鄭栗兒主編（1998）『遇見 100%的村上春樹』台北・時報文化。

John Tomlinson（1991）*Cultural Imperialism: A Critical Introduction*. London: Pinter.

－片岡信訳（1997）『文化帝国主義（新装版）』東京・青土社。

中嶋昌弥編（1994）『ポピュラー文学の社会学』東京・世界思想社。

龍協濤（1997）『読者反応理論』台北・揚智文化。

Escarpit, Robert（1958）*Sociologie de la littérature*. PUF, Paris. －大塚幸男訳

（1959）『文学の社会学』東京・白水社。葉淑燕訳（1986）『文学社会学』台北・遠流出版。